

一八八五年十月十八日(日)

## 大聖ヴィジャヤ・ダシャミーの日に信者たちと

タクール、聖ラーマクリシュナ、シャームプクルの家で信者たちと共に

大聖ヴィジャヤ・ダシャミー(訳註)。一八八五年十月十八日。タクール、聖ラーマクリシュナはシャームプクル(訳註)の家におられる。お体の病気を治療するためカルカタに来られたのだ。信者たちが常に付き添って、何かとお世話申し上げている。信者たちは、まだ誰も世俗生活を捨ててはいない。——自分の家からタクールのもとに通ってくるのである。

〔スレンドラの信仰——大実母(マ)よ、どうぞ胸(ハ)の中にいらして下さい〕

涼しい季節の朝の八時。タクールはご病気でベッドの上に坐っておられる。相変わらず五才の童子のように大実母(マ)よりほかは何もご存知ない。スレンドラが来て坐った。ナヴァゴパール、校長、ほかにも誰彼が来ている。スレンドラの家でドゥルガー・プージャが行われていた。タクールはいらっしゃることができないので代わりに信者たちをやって神像を拜ませた。今日はヴィジャヤ(神像)を水に沈め

る日)なのでスレンドラは憂うつになっていた。

スレンドラ「家から逃げてきました」

聖ラーマクリシュナ「(校長に)——それがどうしたって言うんだい? 大実母よ、どうぞ胸の中にいらして下さい!」

スレンドラは、グマー、マーグと言つて、さかんにバラメーシュワリー(至高の女神/ドゥルガー女神)のことをくどくどと話しはじめた。

スレンドラのこの様子を眺めて、タクルの目には涙がにじんできた。校長の方を見て、感極まつて詰まったような声でおっしゃる。——「この信仰! アー、篤い信仰の人だねえ!」

(訳註1) ヴィジャヤ・ダシャミー——十日間つづくドゥルガー祭の十日目のお祭りで、女神が悪魔に勝利したことを祝う日である。ヴィジャヤは勝利、ダシャミーは十日を意味する。それまでの九日間はナヴァ・ラートリーと言ひ、ナヴァは9、ラートリーは夜を意味し、九日間にわたり女神がアスラと戦う。

(訳註2) タクルの喉の病気が悪化し、南神村でお世話するのが難しくなってきたので、信者たちは話し合つて、カルカッタのバグバザール地区ドゥルガーチャラン・ムケルジー通りに、屋上からガンジス河が見える家を借りて一八八五年九月二十六日にタクルをお連れしたが、広々とした南神寺院での生活に慣れてきたタクルは小さな家に入ることを断られたので、そこからバララム・ポースの家まで歩いて行かれ、一週間滞在された。その間に信者たちはシャームプクル地区に一軒の家を借りて、一八八五年十月二日の夕方、タクル、聖ラーマクリシュナにそちらに移っていただいた。

聖ラーマクリシュナ「昨日の夕方七時か七時半ころ、前三昧パーヴァのなかでお前のところの大広間が見えた。神像が祀ってあって、みんな光で充ち満ちていたよ。ここもあそこも一つになっていた。一つの光の流れが二つの場所を結びつけていた——この家と、お前たちのいたあの家と！」

スレンドラ「その時刻に私はその広間について、ママー、ママーと祈っていたのです。兄たちはもう二階に上がってしまっておりまして。マーが、『また、来ますよ』と言ってくれたような感じがしました」

〔タクール、聖ラーマクリシュナとバガヴァッド・ギーター〕

午前十一時ころ、タクールは病人食を召し上がった。モニはタクールのお手に口すすぎの水を注いだ。

聖ラーマクリシュナ「モニに——ヒナ豆を食べてラカールは腹をわるくした。サットヴァ的食事をするのがいいね。お前、ギーターでそのことを読まなかったかい？ お前、ギーターを読んだんだろう？」〔訳註——『人の好む食物にも三種類ある』——ギーター17・7——〕

モニ「はい、読みました。正しい食事のことが書いてあります。サットヴァ的食事、ラジャサ的食事、タマサ的食事。それからサットヴァ的慈悲、ラジャサ的慈悲、タマサ的慈悲。——サットヴァ的、我、というようなことがいろいろ述べてありました」

聖ラーマクリシュナ「ギーターの本を持っているのかい？」

モニ「はい、持っております」

聖ラーマクリシュナ「あれにはすべての聖典の精髓エッセンスが書いてあるんだよ」

モニ「仰せの通りと思います。いろいろな種類の見神のことが出ております。あなた様のおっしゃいましたように、いろいろな道を通じてあの御方のところへ行くこと——ジユニータ 智識、バクティ 信仰、カルマ 行為、ダイヤ 瞑想……」

聖ラーマクリシュナ「カルマ・ヨーガの意味がわかるかい？ すべての行為の結果を至聖バガヴァンに捧げることだ」

モニ「はい、そのように書いてありました。それから行為をするにあたって、三種の仕方があるということも——」

聖ラーマクリシュナ「どんな種類だっけ？」

モニ「第一は智識を得るための行為。第二は人びとに（真理を）教えるための行為。第三は生まれつきの性格からの行為。この三つでございます」

タクルールはお口をすすいだあと、パ 嘔み煙草シを味わっておられる。モニにもお下がりプラサードの嘔み煙草シを下さった。

### 聖ラーマクリシュナ、ハンフリー・デービー卿とアヴァターラの教義

タクルールは校長を相手にサルカル医師の話をなさる。先日、校長はタクルールの病状報告のため、サルカル医師のもとを訪れたのである。

聖ラーマクリシユナ「お前と、どんな話をした？」

校長「先生の部屋には本がどつきりございましてね、私は一冊の本をそこに坐っているながら読みました。読みながら、ところどころ先生に朗読して聞かせました。ハンフリー・デービー(註3)卿の本です。アヴァターラの必要性のことについて書いてあるのをごさいます」

聖ラーマクリシユナ「ほんとかい？ それでお前、どんなことをしゃべったんだね？」

校長「も一つ、こういうことが書いてあるのです。『Divine Truth must be made human Truth to be appreciated by us (神の言葉は、人間を通してでなければ人間に理解する)とはできない』と。

故に神アヴァターラの化身は必要であり、必然であるというのをごさいます」

聖ラーマクリシユナ「ワー、どれもすばらしい言葉だ！」

校長「そのイギリス人はこう説明しています。太陽を直視することはできない。しかし、太陽の光が差した所 (Reflected rays『反射光線』)を直視することはできる、と」

聖ラーマクリシユナ「すばらしい説明だ。それから？」

校長「それから、ある場所ではこうあります——正しい智識、すなわち信念である、と」

聖ラーマクリシユナ「これも大それたいい言葉だ。信念があればすべては成就する」

校長「それから、そのイギリス人はローマ神話にでてる神々を夢に見たそうです」

聖ラーマクリシユナ「そんな本があるのかい？ だとしたら、神さまがそこで仕事をしていなさるんだ。それから、どんな話をした？」

〔聖ラーマクリシュナと、世界の利益、或いはカルマ・ヨーガ〕

校長「彼らは、世界のために有益なことをしろ」と主張するのです。ですから、私はあなた様がおっしゃったことを話してやりました」

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハッ、どんな話だい？」

校長「例のシャンブー・マリックの話です。彼はあなた様にこんなことを言いました。『私の願いは、自分の財産を病院や施薬所や学校をつくるために費うことです。そうすれば大ぜいの人のためになりますから——』と。あなた様はそれに対してこうお答えになりました。『もし神さまが目の前に来なすつたら、お前はほんとにこう申し上げるのかい？ 私にこれこれの病院と施薬所と学校を作らせて下さい』と。それから、もう一つ話しました」

聖ラーマクリシュナ「フーン。別な階層カラスにいる人たちは、この世にそういう仕事をしに来たんだよ。

ナニ、それから？」

校長「この話です。カーリー参詣に来たのが目的なのに、道ばたに大勢いる乞食に恵んばかりい

（訳註3）ハンフリー・デービー（1778～1829）——イギリスの化学者で発明家。アルカリ金属やアルカリ土類金属をいくつか発見したことで知られ、塩素やヨウ素の性質を研究したことも知られている。電磁場の基礎理論を確立したマイケル・ファラデーは彼の助手をしていた。

たらどうなる？ とにかく、何が何でも一度カーリーに参拝することです。そうしてから、乞食の面倒を見たかっただら見るがよろしい、と」

聖ラーマクリシユナ「それから、どんなこと言った？」

〔聖ラーマクリシユナの信者と官能の克服〕

校長「あなた様のところに来る人たちの多くは情欲を克服している、と申しました。すると先生は、『私も情欲のようなものはとくに卒業した。わかりますか？』と申しました。そこで私はこう言ったのです。『あなたは自他ともに許す立派な人格者です。欲情を克服なさったと言っても、ちつとも驚くことではありません。でも、名もないちよつとした人たちが、あの方のところへ行くようになってから官能を征服したのです。これは驚くべきことですよ！』と。そのあとで、あなた様がギリシユ・ゴーシユにおっしゃったことを話しました」

聖ラーマクリシユナ「何と話したんだね？ ハッハッハ」

校長「あなた様はギリシユ・ゴーシユにこうおっしゃいました。——『あの医者は、まだお前のところまで行っていない』と。彼があなた様をアヴァターラだと呼びしていることを指して、そうおっしゃったのです」

聖ラーマクリシユナ「お前、アヴァターラの話をあの医者に話すといいよ。アヴァターラ——人を解脱させてくれるお方のことだ。今まで十人のアヴァターラがあったとか、二十四人のアヴァターラ

が現れたとか言われているが、そのほかにも数えきれないほどのアヴァターラがいるんだよ」

〔酒を徐々にやめていく〕

校長「先生はギリシユ・ゴーシユにひどく関心があるらしゅうございます。ギリシユは酒をやめたかどうかなど、そんなことばかり質問しました。彼のことを、ことのほか注目しているようでした」

聖ラーマクリシユナ「そのことをギリシユに言ったかい？」

校長「はい、話しました。それから酒をやめるようにという話も——」

聖ラーマクリシユナ「何と言っていた？」

校長「彼はこう申しました。『君たち皆でそう言うなら、私はそれをタクールのお言葉だと思うことにする。でも、絶対にそうするとは言い切れないんだが……』」

聖ラーマクリシユナ「（喜ばしそうに）——カリパダがね、『あの人は酒を完全にやめました』と言ったよ」

### 至聖との合一ヨীগ

〔ニティヤとリーラー (The Universal Ego and the Phenomenal World.)〕

午後になってサルカル医師が来た。息子のアムリタとヘムが医師についてきた。ナレンドラはじめ信者たちが部屋にいる。タクールはアムリタひとり手を相手に話していらっしやる。——「お前、瞑想



しているかい？」と質問なさったり、「瞑想ダイヤーナの境地というのはどういふものか、知っているかね。心が油の流れのようになるんだよ。一つの想念——神の想いでね。ほかには何の想いも入ってこないんだ」

「こんどは、タクルールは皆と話をなさる。

聖ラーマクリシュナ〔医師に〕——あなたの息子はアヴァターラを認めないね。それでいいさ。信じようと信じまいと。

あなたの息子はなかなかいいね。そりやそうだろうね？ ポンベイ・マンゴーの木に酸っぱいマンゴーがなる筈はないもの。彼の神への信仰は、何てすばらしいんだろう！ 神に心をよせている人こそ、人間と言えるんだよ。人間——意識のある人、靈意識に目ざめた人、神ひとりが真実で、他はすべて虚仮まぼろしだということが心底分かつている——そういう意識の人こそ人間だ。アヴァターラを信じなかつたつて、ちつともかまわない。

神。——それからすべての生物、世界は神の豊かな表現。これさえわかれば十分だ。大金持ちと彼の大庭園アヴァターラの関係だ。

神の化身は今までに十人あったという説もあるし、二十四人だという説もある。そうかと思えば、いや、神の化身は無数だ、という説もあるんだよ。

あの御方の力が特別に顕現あらわれしているところにはアヴァターラがいる！ これがわたしの考えた。それから、見えるものはすべてあの御方がなっていないさるのだ、という考えもある。ベルの実のように、

タネと皮と果実と、三つひつくるめて一つなんだ。永遠の二者が多様活動をし、リーラーそのものが永遠なる一者の性質なのだ。永遠の二者なしにはリーラーはあり得ない。リーラーをつかんでは放し、つかんでは放しながら究極に到達するんだよ（ハシゴを一段一段放しながら上っていくように）。

「我々意識があるかぎり、リーラーを完全に放しきることはできない。ネーティ、ネーティ（これではない、これでもない）」と現象否定しながら瞑想でヨーガに入り、永遠の二者と合体することはできる。しかし、何一つ取り去ることはできない。さっき言ったベルの实のように——」

医師「全く、その通りです」

聖ラーマクリシュナ「カチャ（聖者ブリハスパティの息子）が無分別三昧に入った。三昧が解けてからある人が、『あなたは今、何を見ているのか？』とたずねた。するとカチャは、『全世界がああ御方に溶けている！ ああ御方だけがいいになっていく！ 見えるものすべて、ああ御方だ。何を捨てたらいいのか、何を拾ったらいいのか、全くわからない』と。

わかるかい？——永遠絶対と変化相對の二つの関係を悟って、神の召使いという気持ちで暮らすことだ。ハヌマーンは形ある神にも、形なき神にも対面した。その後で召使いの態度、信仰者の態度をとっていた」

モニ（心で思うよう）——ニティヤとリーラーの両方を認めるべきだ。ドイツでヴェーダーンタ哲学が紹介されたとき、数人のヨーロッパ人哲学者も同じような意見を持った。しかし、タクルがおっしゃるには、『すべてを捨てよ——女と金を捨てよ——さもなくば、ニティヤとリーラーに対面する

ことはできない』と。正真の、俗世を捨てた人、完全に無執着であること、ここがヘーゲルはじめヨーロッパの哲学者の考え方と較べてタクトルの特異な点である。

### 聖ラーマクリシユナと神アツァターラの化身の教義

[Reconciliation of free will and predestination (自由意志と宿命・運命との折り合い)]

医師はこう言うのである。神は我々を創造して、我々すべての魂を永遠に導き進歩させて下さる筈である。故に、AがBよりも優れている、偉大である、というようなことは本質的に信じられない。だから神アツァターラの化身を認めない、と。

医師 [Infinite Progress (無限の進歩)! もし、それがないとしたら、あと数年長生きしたって、何の意味もないじゃないですか! それに、私だつて首をくくつて死んでもいいことになりませんよ! 今さら神の化身だなんて! 当たり前前に排泄行為をする人間の前に、畏れおおそののいてひれ伏すなんて! ええ、しかし、Reflection of God's light (神の光明が人に反映して輝いている)なら認めますがね」

ギリシユ「アツハツハツハア。しかし、あなたはその God's Light (神の光なるもの)を見たことがない——」

医師はその答えに躊躇しているようであった。すると隣りに坐っていた友人が、何ごとかヒソヒソと耳打ちした。

医師「あなただつて、その影しか見ていない筈だ」

ギリシユ「I see it（私は見ておりますよ） I see the Light（私はそのライトを見ているんですよ）  
聖クリシユナが神の化身だということを Prove（証明）しましょう——出来なければ、自分の舌をチョン切つてもいいです」

〔熱病患者の分別——完全智に達すれば分別は止む〕

聖ラーマクリシユナ「そんなこと言い合つたつて何にもならんよ。そんなことは熱病人のウワゴトだ。熱にかざれている病人は——池の水を全部飲むとか、飯を釜いっぱい食べる——とか言うだろう。医師は聞き流して、『いいよ、いいよ、できるよ。良くなつたら、今言つたことが何でもできるよ』などと言つてあしらつてゐる。

バターに水分があるうちは鍋でジージ音をたてる。すっかり水気がなくなると音はしなくなる。人はね、心の状態にびつたり合つた神さまを見るんだ。金持ちの家へ行つたら女王の絵やおエラ方の絵ばかり飾つてあつた。信仰者の家には神々の絵がかけてあるよ！

ラクシユマナがラーマに言つた——『ヴァシシユタ様のような賢者でも、息子を失つて嘆き悲しむとは！』するとラーマはこう答えた——『弟よ、智あるものには無智もある。明るさを感じる人は暗さも感じる。だから、智と無智の両方を超えろ』神を真に覚ればそういう境地になる。これをヴィジュニャーナ（大智、大覚智）というんだよ。

足にトゲが刺さつたら、もう一つのトゲを用意して刺さつたトゲを抜く。抜いたら二つとも捨ててしまふ。智のトゲで無智のトゲを抜き、そして智と無智のトゲを二つとも捨てることだ。

完全智に達した徴しるしがあるんだよ。分別かんがえが止まってしまふんだ。さつき言つたように、未熟な(煮えない)うちは、バターでもジクジク音をたてる。

医師「完全智」というようなものがどこにありますか？　すべてが神だとあなたは言う！　しかもあえて、パラマハンサと呼ぶのを許していて、その地位についてるのは何故ですか？　なぜこの人たちが来てあなたに仕えているのですか？　そして又、あなたは何故(よく煮えて水気がなくなったバターのように)黙っていないのですか？」

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハ……。水は静かでも水、ゆらゆら動いても水、大波小波を立てても水——」

〔Voice of God or Conscience (神の声または良心)——象使い神〕

「それにもうひとつ——象使い神の声をなぜ聞いちゃいけない？　グルが弟子に教えた。あらゆるものはナーラーヤナだと。気狂い象がノッシ、ノッシやってきたとき、弟子はこれもナーラーヤナだと思つてそのままそこに突っ立っていた。象使いが金切り声をあげて、みんな、逃げる！　みんな、逃げるーッ！」と叫んでいる。でも弟子は逃げなかった。象は彼を地べたに叩きつけて行つた。瀕死の有様で気絶していた。口に水をふくませているうちに気がついた。『お前、なぜ逃げなかったのか？』

と聞かれて彼は答えた——『なぜって？ 先生が、あらゆるものはナーラーヤナだ』とおっしゃったから！』するとグルは、『息子よ、ではなぜ象使い神の言葉を聞かなかったのだね？』と。純粹な心、純粹な知性として、あの御方はわたしたちのなかに宿っていないさる。そして、ワタシは道具で、あの御方が使い手だ。わたしは部屋で、あの御方が住み手だ。あの御方こそ象使い神だ』

医師「ひとつ質問します。ではなぜ、この病気を治してくれとおっしゃるのですか？」

聖ラーマクリシュナ「私という水があるうちには、ごらんの通りの有様だ。大海を想像してごらん。上下左右水でいっぱいだ。そのなかに一つのかめが沈んでいる。かめの内も外も水だ。だが、かめが壊れないかぎり、水は一つにならない。この私のかめをつくって置いて下すつたのは、他ならぬあの御方なんだよ』

〔私とは何か？〕

医師「では、この私というものはいったい何ですか？ 説明してほしいですね。あの御方は我々をタブラかしていらつしやるのですかね？」

ギリシュ「先生、あの御方の悪フザケじゃない』ということ、それが、どうしてわかるんですか？」  
聖ラーマクリシュナ「アツハツハ。この私をつくって置いて下すつたのはあの御方さ。あの御方の遊び、あの御方のリーラー（遊戯）だよ！ 王様に四人の息子がいる。四人とも王子さまだ。でも遊ぶときには、一人が大臣になったり、別の王子が警官になったりする。王子たちが警察ゴッコをし

て遊ぶんだよ！

(医師に)よく聞きなさい！ あんたがもし、アートマンと対面出来たら、いま言ったことは全部わかる。あの御方を見たら、疑問は皆いつべんに消える」

[Sonship and the Father (息子と父親)——聖ラーマクリシュナと智識ジニユナのヨーガ]

医師「疑問が全部なくなる、などということがあり得ますか？」

聖ラーマクリシュナ「わたしの今まで言ったことを、よく聞いていなさい。後になつてもつと聞きたいと思つたら、独りになつて直接あの御方に話しかけたらいい。あの御方に真剣になつて尋きくんだよ。『なぜ、こんなふうになさつてゐるんですか？』と言つてね。

家の息子は乞食に、茶わん一杯の米くらいはやれる。だが、乞食が汽車賃をねだつた場合は、家の主人の裁量にまかせなければならぬ。

——(医師は無言のまま)

そうか、あんたは理屈が好きなんだね。じゃ、わたしもチョッピリ理屈みたいなことを言うから聞いてくれ。——智者にとつては神の化身などというものは存在しない。クリシュナがアルジュナに言った——『君はわたしのことを、アヴァターラ、アヴァターラと言うが、ひとつ君に見せたいものがある。従ついておいで——』アルジュナは従ついて行つた。しばらく歩くと、『ほら、あそこに何が見える？』とクリシュナが聞く。『大きな木があつて、黒い実がたくさん枝になつています』とアルジュナは答

えた。するとクリシュナは言った。『あれは黒い実ではないよ。もっと前に行つてよく見てごらん』アルジュナは、その黒い実だと思つたものがひとつひとつ全部クリシュナであることがわかつた。クリシュナ——『見たか？ わたしと同じようなクリシュナが、どんなに沢山あそこに実を結んでいるかを！』

カビールダースはクリシュナのことをこんなふうにつていた——『彼は、ゴーピーたちと手をとつて猿踊りばかりしていた人だ！』

神に近づくほど、神のウバーデイ(属性・形)は減つてくる。最初のうち信者は、十本腕の神を見る。もっと先へ進むと四本腕になる。もっと進むと二本腕のかわいいゴパール(幼な子姿のクリシュナ)だ！進めば進むほど仰々しく威圧的<sup>ぎやうぎやう</sup>なところが少なくなつてくる。いよいよ前に進むと、ただ光を見るだけ。——何のウバーデイもない。

ちよつと、ヴェーダーンタの論理<sup>ヴエーダヤウ</sup>を聞きなさい。王様の御前に一人の魔術師が魔法を見せに来た。彼が少しその場から動くと、向こうからきらびやかな服装をして馬に乗つた人がやつてくるのが王様の目に見えた。手には何やら物々しい武器を持っている。王様はじめ並いる見物人は自分の心に言ひかかせた——ホントウにあるのは何だろう？ 馬はもちろんホントウじゃない。あの服装も武器もホントウではない。すると遂に、馬にのつていた人間だけがひとりそこに立っている！ そうだろう、ブラフマンのみ実在で、この世界は虚仮<sup>まぼろし</sup>だ——よくよく分別判断していくと、ブラフマン以外のものは何も残らない！



医師「そのことについては、私に何の異議もありません」

〔The World and the Scare-Crow (世俗のカカシ)〕

聖ラーマクリシュナ「だけど、そのマボロシを追い払うのは容易なことじゃないよ。智識を得た後だつて残っているんだからね。夢で虎に出くわすと、夢が醒めたあとでも胸がドキドキする！

畑に泥棒が入ろうとする、そこには侵入者をおどすために人の形をしたカカシが立っている。その姿を見てビックリした泥棒は、容易なことで畑に足を踏み入れられない。仲間の一人が恐る恐る近づいてよく見ると、ただのワラ人形だ。戻って皆に言った。『ただのカカシだ。心配ないよ』それでも皆はなかなか畑に入ろうとしない。胸がドキドキするからと言って——。そこでその先導はカカシを地面に倒して、また皆に言った。『何もない、何もない』これが、ネーティ、ネーティだ」

医師「これは、いいお話です」

聖ラーマクリシュナ「(ニッコリして)——ホウ！ どれが？」

医師「けっこうなお話です」

聖ラーマクリシュナ「じゃひとつ、サンキュー」と言っておくれよ」(訳註——この時タクル自ら、

「Thank you」と英語で発音された)

医師「私の心のうちがおわかりになりませんか？ どれだけ苦勞してあなたに会いに来ているか

……」

聖ラーマクリシュナ「アハハハ……。馬鹿のために何か話してくれ。ヴィビーシャナはセイロンの王になろうとしなかった。——『ラーマよ、あなたを得たのに、今さらセイロン王などになつて何の意味がありませんよ』と言つてね。するとラーマはおつしやつた。『ヴィビーシャナ！ 君は馬鹿者どものために王位につけ、ラーマのためにあんなに尽くしたあなたは、いったい何を得たのですか？』などと言う連中のために、王様になれ』と」

医師「ここに、そんな馬鹿がいるのでしょうか？ おりませんよ」

聖ラーマクリシュナ「アツハツハツハ……。どういたしまして！ ホラ貝もいるし、カタツムリもいるし、それから金魚のウンコもね！」（一同大笑）

### プルシャとプラクリティ——適任者

医師はタクールに薬を処方し、二個の丸薬を渡した。そしてこう言った。「この二個の丸薬を差し上げます。——プルシャとプラクリティです」（一同笑う）

聖ラーマクリシュナ「ハツハツハ……。そうだよ、あの二つはいつもいつしよにいるんだよ。鳩を見たかい、オスとメスは決して離れていられない。プルシャのいるところには必ずプラクリティがいるし、プラクリティのいるところには必ずプルシャがいる」

今日はヴィジャヤの日である。タクールは医師に何か甘いものをおやつに出すようにとおつしやつた。信者たちは菓子を持ってきて医師に供した。

医師「(食べながら)——このお菓子をいただいたことに対して、ッサンキューッを申しましよう。決して、あなたの教訓に対して言うのではありません。安っぽくなるので、ッサンキューッなどと口に出しては言いますまい」

聖ラーマクリシュナ「ハハハ。あの御方に心を寄せること。そのほかに何を言ったかね？ それから少しずつでも瞑想するようにすること。(若いナレンの方を指して) ホラ、この青年はすっかり心を神にあずけている。こんなようなことをあんたに言ったただけだよ」

医師「私だけじゃなくて、ここにいる人たちにも話してやって下さい」

聖ラーマクリシュナ「消化力に応じたものを食べさせなけりゃならん。さつき言ったようなことを、誰でもが理解できると思うかい？ 母親が魚を買ってきた。子供によっては消化力こなすがまちまちだ。あの子には油っこいピラフにして食べさせるが、別な子には薄味のシチューなどにする。油っこいもの食べると腹をこわすから——」(一同笑う)

医師は帰っていった。今日はヴィジャヤの日である。信者たちは皆、身体を真つ直ぐに投げ出してタクールを礼拝し(シヤスタンガ・プラナム)、お足の塵をいただいた。それがすむと、お互いにしっかり抱き合った。喜びには際限がない。タクールはひどい病気だというのに、皆にそれをすっかり忘れさせて下すつたのだ！ 皆は長い時間をかけて次々と愛をこめて抱き合い、神への信仰と友情を誓い合つた。甘い菓子も用意してあつた。タクールの傍には若いナレンと、校長と、ほか二、三の信者が坐っている。タクールは楽しそうに話していらつしやる。さっきのサルカル医師のことが話題になつた。

聖ラーマクリシュナ「あの医者には、もうあれ以上言わない方がいいんだよ。

樹を切り倒すとき、さいごの切れ目を入れると、木こりは樹のそばをよけて立っている。少しすると木は自然に倒れる」

若いナレン「アツハツハツハ。すべてが Principle（原理）だ！」

聖ラーマクリシュナ（校長に）——あの医者は、ずい分変わったと思わないかい？」

校長「おっしゃる通りです。ここにくると、何か途方にくれたような様子になりますね。薬の話もさっぱり致しませんし……。私どもがそのことを聞くと、『そ、そうそう、薬でしたね』などと言つて……」

数人の信者たちが広間で歌をうたっていた。彼らがタクールのいらっしゃる部屋に戻るとタクールはおっしゃった。——「お前たち、あつちで歌をうたっていたが、どうして又、あんなに調子が合わなかったんだらうね？ 誰だったかオンチがいたつげが……。ちようど、あんなふうだったよ！（一同大笑）」

若いナレンの親戚にあたる青年が来ていた。ひどくめかしこんだ服装で、メガネまでかけている。タクールは若いナレンと話をしておられる。

聖ラーマクリシュナ「ね、この道を一人の青年が通ったがね、ヒダのついた上衣ジャマを着ていた。もつたいぶつた歩き方をしてさ。上衣のヒダを見せびらかすために、時どきチャドルをめぐっていたつげ……。そして、あたりをそれとなく見廻して——誰か自分の服を注目していないかどうか。歩くとか

二股だということがすぐわかる（一同大笑）。まあ一度、見てごらんよ。

クジャクは羽をひろげて見せびらかす。でも、足はじつに汚い！（一同笑う）ラクダはとても醜い——あれは、どこもかしこも醜いね」

若いナレンの親戚の青年「しかし、性格はいいです」

聖ラーマクリシュナ「いいかも知れない。だが、トゲ草を食べるね。——口から血を流しながらも食べるんだ！ 世間の人は子供を死なせて悲しい思いをしても、性懲りもなく後から後からつくって、子供、子供と大きわぎしている！」